獨協医科大学看護学部紀要 Vol. 4(2010)
Bulletin of Dokkyo Medical University School of Nursing

原　著

慢性期看護学実習指導の実際とあり方の検討

－透析看護に携わる実習指導者へのインタビューを通して－

Study on the actual state of the practical training for a chronic stage nursing and the way it should be

-Through the interviews with the practical trainers engaged in dialysis nursing-

鈴木　美津枝　　村上　礼子　　鈴木　純恵
Mitsue Suzuki　Reiko Murakami　Sumie Suzuki

獨協医科大学看護学部
Dokkyo Medical University School of Nursing

要　旨

＜目的＞透析看護に携わり，実習指導経験を有する看護師への面接を通して，指導の実際を明らかにし，あり方を検討することである．

＜方法＞研究参加への同意を得た6名への半構成的面接を通して得たデータから逐語録を作成した．分析は目的に関連する内容を一文一義に区切り，分析の最小単位とした．次にこれらを内容の類似性に沿って分類抽象化した．全過程において，共同研究者間で討議検討を重ね，分析の信憑性を確保した．

＜結果と考察＞分析では10のカテゴリーが抽出され，これらの関連性から次の看護学実習指導の一連のプロセスが得られた．すなわち，指導者が実習目的を理解していない場合には，学生に対して消極的な関わりをしていたが，指導者が実習目的を理解している場合には，患者の心理面の理解を促す場を設定するなど積極的に関わっていた．このことから，実習の事前準備として，教員は指導者と実習目標を共有する重要性が示唆された．また，学生の実習に対する意欲を感じないと指導者の意欲が低下していた．そのため，学生の実習前の予習による学習意欲の向上を図ると同時に，指導スキルの向上，実習成果のフィードバックなど指導者へのアプローチが必要と考える．そして，指導者は実習に対する要望として，教員との密な意見交換の必要性を感じ，限界として，勤務しながらの指導をあげていた．これらは，透析室での看護学実習に特化したものではなく，慢性期看護学実習に共通する課題として示唆された．

Abstract

Objective: To clarify actual trainings through interviewing nurses with experiences of practical training engaged in dialysis nursing, and examine the way it should be.

Methods: We made a transcription from the data obtained from semi-structured interviews with 6 trainers who consented to the study participation. We punctuated the objective-related contents for one meaning per one sentence as the smallest analytical unit. Then we classified them for abstraction by similarity of the contents. Over the whole processes, discussions were repeated

among our co-workers to secure the analytical credibility.
Results and Discussion: Ten relevant analytical categories were extracted, from which a set of processes for the next practical nursing training was obtained: Trainers who poorly understood its objective was negative in approach to students, while competent trainers positively participated in the interview by setting an opportunity for patients to understand their psychological aspect as well. Hence it was suggested that it was important for teachers to share the training objective with trainers as an advance preparation for a practical training. Lack of interest observed in students for the training lowered a trainers' eagerness. Thus it may require higher students' level of learning desire through their pre-training preparatory work, and at the same time to make approaches to trainers by improving training skill, feed-backing the practical training outcomes, etc. Furthermore, the trainers presented their request related to the practical training, such as a necessity to closely exchange opinions with teachers, but said as a limit a difficulty of training while on duty. It was suggested that these problems were not specific to the practical nursing training in a dialysis room, but also commonly encountered during practical nursing training at a chronic stage.

キーワード：看護学実習，慢性期看護，透析，実習指導者
Keywords ：Practical nursing training，Chronic stage nursing，Dialysis，Practical training trainer

Ⅰ．はじめに

近年，生活習慣が原因と考えられる高血圧や糖尿病，冠動脈疾患などの慢性疾患が増加している．慢性疾患もつ病者は生涯にわたり自己管理が必要となり，病者自身だけでなく，病者を取り巻く家族や職場などにさまざまな影響を及ぼしている．黒江[1]は病気の慢性的状態の管理は，症状をコントロールするとか，障害をもって生きるとか，あるいは長期の不治の病に苦しんでいる人や家族の生活にもたらされる心理社会的変化に適応するなどのこと以上のものを意味すると述べている．さらに，慢性疾患をもつ人とその家族への看護を考えるときには，常に病気の慢性状態がもたらす問題の多様性や多面性，複雑性を考慮した総合的なものを目指さなければならないと述べている．これらのことから，慢性病者の生活者の視点に立脚した支援が重要であると考える．今後，さらなる慢性病者数の増加に加え，その支援には高度な実践力が必要であることから，看護職者の慢性病者に対する支援が期待されている．そのため，看護の基礎教育において学生が慢性期看護を学修することは重要と考える．

様々な慢性疾患の中でも，血液透析患者は生涯にわたり毎日の食事や水分等の管理，一回の治療に3～4時間かかる透析治療を週に3～4回行っていかなければならない．先行研究においても，透析を継続していく患者の身体・心理面の管理やQOL，セルフケア能力の向上に対する適切な看護援助の必要性について報告されている[2) 3)]．これらのことから，学生が透析治療を受けている患者の看護をとおして，慢性病者やその家族への看護を学修することは有効と考える．

実習指導者に関する先行研究では，実習指導による指導者の心理面，学生との関わりに対する認識，指導に対する意識などについてテーマごとに明らかにされている[4)～8)]．しかし，透析看護に携わる看護師の実習指導の実際については明らかにされていない．

そこで，透析室における実習指導の実際を明らかにし，今後の慢性期看護の実習指導のあり方を検討するための基礎資料としたいと考える．

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は，透析看護に携わる看護師の実習指導の実際について明らかにし，慢性期看護実習のあり方について検討することである．

Ⅲ．研究方法

１．研究対象者

研究対象者は，臨床看護学実習を受け入れている病院で透析看護に携わり，現在透析室で看護学生に指導している，或いは指導経験をもち，研究参加に同意が得られた看護師とした．

２．データ収集期間

データ収集は，平成21年7月から平成22年6月までの12ヵ月間であった．

３．データ収集方法

データ収集は半構成化面接法を用い，面接時間は1人につき約30～40分であった．質問内容は，「看護学実習で学生にどのようなことを指導していますか，また，どのように指導していますか」，「学生の学修姿勢はどうでしたか」，「実習指導で良かったこと，あるいは困ったことなどはありますか」，「実習でどのような工夫をしていますか」などについて自由に語ってもらった．

４．分析方法

録音テープから逐語録を作成し，その中から実習指導について話している箇所を抽出し，一文一義に区切り，分析の最小単位とした．次に，それらの類似性にしたがって帰納的に分類，抽象化し，カテゴリー化した．全分析過程で，研究者間で討議・検討を重ね，分析の信憑性の確保に努めた．

Ⅳ．倫理的配慮

本研究は，獨協医科大学生命倫理審査委員会の承認が得て行った．研究者が研究目的，意義，具体的方法，参加拒否の自由，面接の中途での中止，データ使用の制限，秘密保持の厳守，研究終了後の録音テープの破棄などについて口頭と文書で説明し，署名にて対象者の同意を確認した．

Ⅴ．結果

１．対象者の概要

透析治療を行い，看護学生の実習を受け入れている3つの病院で透析室に勤務し，実習指導を行っている女性看護師6名．看護師経験年数14年～30年（平均21年），臨床実習指導経験年数0年～14年（平均5年），透析看護経験年数2年～12年（平均7年），透析室実習指導経験年数0年～6年（平均3年）であった．

２．実習指導の実際を説明するカテゴリー

データを分析した結果，10のカテゴリーが抽出され，各々が実習指導の実際を説明する概念であった．さらに，各カテゴリーの関連をデータの文脈に沿って関連づけた結果，看護学実習指導の一連のプロセスが得られた．

はじめに各カテゴリーの説明について述べ，次に各カテゴリー間の関連について述べる．以下，カテゴリー名を【　】で表す．

１）各カテゴリー名の説明と実例

(1)【実習目的が不明瞭であるためどのように対応していいのか分からず積極的に関わっていない】は，指導者が実習目的を理解していない場合の学生への対応である．「学校の実習に関しての目標，目的が分からないのでどのように対応していいのかが分からない」「実習目的がはっきりしないのと，学校や学生さんの方針があると思うため積極的な指導をしようとは思わない」などの語りから抽出された．

(2)【透析療法の実際を説明する】は，指導者が実習目的を理解している場合に，学生への指導で心がけている内容である．「透析療法とはどのようなものかを説明する」「透析室の特殊性や他職種間とのチーム医療の理解ため，システム的な部分を説明する」などの語りから抽出された．

(3)【短い実習時間の中で学生に関わるようにしている】は，指導者が実習目的を理解している場合に，学生への指導で心がけている内容である.「短い時間でもなるべく学生と関われるようにしている」「病棟の患者に学生が付き添ってくることが前もって分かっていればはなるべく臨床指導者が関われるようしている」などの語りから抽出された.

(4)【患者の心理面を理解する場をつくる】は，指導者が実習目的を理解している場合に，学生への指導で心がけている内容である.「透析治療を受ける人の心理面の理解には，患者と話すことが一番だと思うため，極力，話ができるよう患者にお願いをする」「学生が患者と話ができるようにお願いしても断られることもあるため，その場合は，看護師から話をして学生にわかってもらうようにする」などの語りから抽出された.

(5)【指導意欲が低下する】は，指導者が学生の実習に対して意欲を感じないときの思いである.「事前学習を全くせずに実習に望む」「質問に対しての反応がよくない」「実習中にビデオを見せたりすると寝てしまう」などの語りから抽出された.

(6)【積極的に説明したいと思う】は，指導者が学生の実習に対して意欲を感じるときの思いである.「学生が自分から質問してきた時には，色々と透析について説明したいと思う」「やる気が見えれば学びにつながる患者とのやりとりを学生に見せて説明したい」などの語りから抽出された.

(7)【机上では学べない大きな学びになっていると感じる】は，指導者が学生の実習成果を感じていることである.「学生が患者と接することで机上の学びとは異なることを学んでくれていると感じる」「学生の実習記録をみて，透析室の実際を見ることが学校では学べない大きな学びになっていると感じる」などの語りから抽出された.

(8)【教員との密な意見交換の必要性を感じる】は，指導者の実習に対する要望である.「学校と臨床は常に行ったり来たりの部分だと思うため，お互いに遠慮はせずある程度の意見交換も必要だと思う」「学生の反応から反省する点があり，実習指導の改善のために学校との話あいが必要だと思う」などの語りから抽出された.

(9)【勤務しながらの指導に限界を感じる】は，指導者が実習指導に対して限界を感じていることである.「看護業務の忙しい時間帯での実習と学生の実習時間の短さの中で指導をすることが難しい」という語りから抽出された.

(10)【短時間での指導に限界を感じる】は，指導者が実習指導に対して限界を感じていることである.「実習時間が短いためもう少しあれば，違う部分で指導することもあると思っている」などの語りから抽出された.

2）看護学実習指導の実際の説明（図1）

指導者が実習目的を理解していない場合には，【実習目的が不明瞭であるためどのように対応していいのか分からず積極的に関わっていな】かった．指導者が実習目的を理解している場合には，【透析療法の実際を説明する】【短い実習時間の中で学生に関わるようにしている】【患者の心理面を理解する場をつくる】ことを学生指導で心がけて関わっていた．しかし，指導者が学生の実習に対する意欲を感じないと【指導意欲が低下】し，学生の実習に対する意欲を感じると【積極的に説明したいと思】っていた．また,指導者は実習の成果を記録から【机上では学べない大きな学びになっていると感じ】ていた．そして，指導者は実習に対する要望や限界として【教員との密な意見交換の必要性を感じる】【勤務しながらの指導に限界を感じる】【短時間での指導に限界を感じ】ていた.

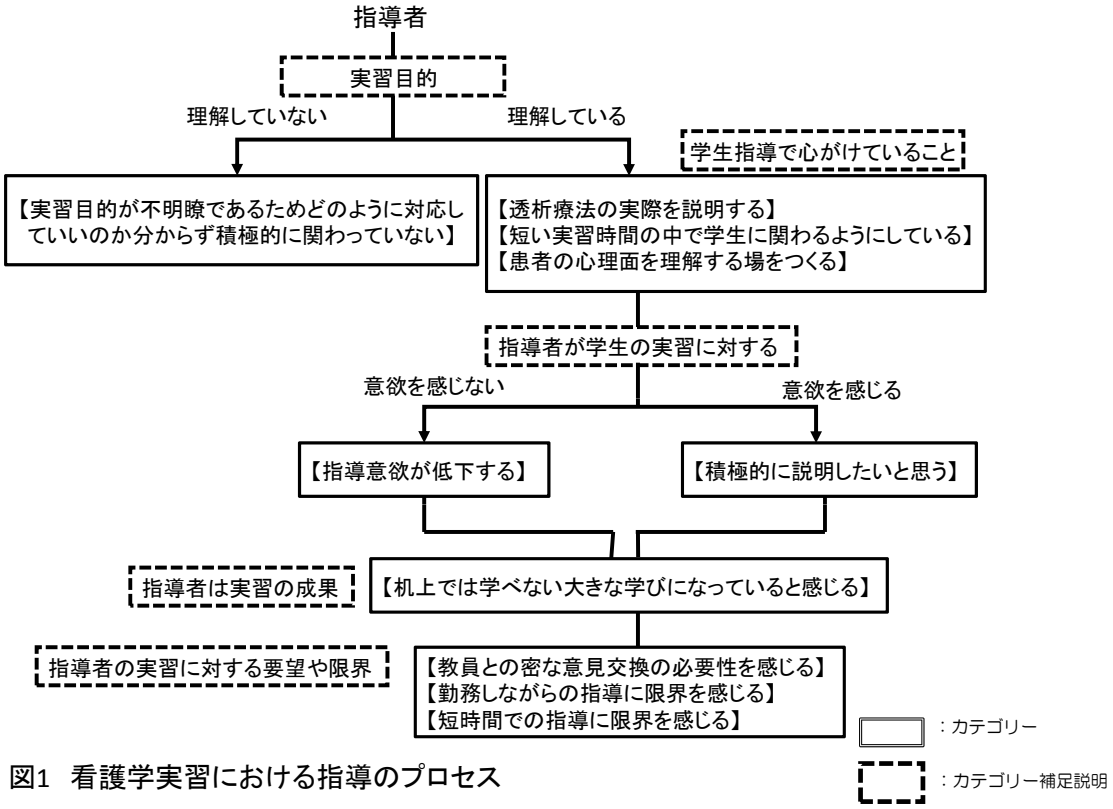

図1　看護学実習における指導のプロセス

Ⅵ．考察

透析看護に携わる看護師の実習指導の実際について明らかにした．その内容から実習の事前準備，実習内容の検討，指導者の意欲向上支援の必要性が見出された．これらの3点から考察し，今後の慢性期看護学実習における教員の課題について検討する．

1．実習の事前準備－教育目標の共有について－

本研究では，【実習目的が不明瞭であるためどのように対応していいのか分からず積極的に関わっていない】という結果から指導者の実習目的の理解不足が明らかになった．橋田ら[6]は，臨地実習における看護師の実習に関する意識調査を行い，実習内容の理解不足として指導・説明の範囲がわからない，学生の到達レベルと指導内容の迷いとして実習の目標が不明瞭で指導の必要性に疑問があるなどの結果を示した．学生が，臨床の場で実際を観て，指導者から直接に説明や指導を受けることは，机上では学ぶことができない看護に必要な知識を得る学習機会であると考える．指導者の実習目的・目標の理解不足は，学生にとって有効な学びにつながらない．そのため，教員は実習の目的・目標を明確に指導者へ伝えていくことが重要であると考える．また，実習の打ち合わせなどに指導者全員が出席できるとは限らないため，学生に関わる指導者全員が実習目的・目標を周知していることを教員は確認する必要があると考える．

2．実習内容－実習期間・時間の検討について－

本研究では実習目的を理解している場合，指導者は【透析療法の実際を説明する】【患者の心理面を理解する場をつくる】【短い実習時間の中で学生に関わるようにしている】ことを心がけて学生と関わっていた．しかし，指導者は受け持ち患者にケアを提供しながら学生と関わっており，【勤務しながらの指導に限界を感じ】ていた．高橋ら[4]，橋田ら[6]，金子ら[7]，によって行われた研究においても指導したいが時間がない，指導する余裕がない，業務が忙しくて学生指導ができないという同様の結果であった．このことから，業務の忙しさから指導

する時間がないということに対しては，実習指導に専念できるよう専任の指導者を配置するなどの対策が必要であると考える．また，本研究では業務の忙しさのほかに，【短時間での指導に限界を感じ】指導したいことが十分に伝えられていないことも明らかになった．このことから，教員が教育内容を精選し，実習内容にあった実習期間・実習時間となっているかについて検討していく必要があると考える．

3．指導者の意欲向上支援

本研究の結果，指導者が学生の実習に対して意欲を感じないと【指導意欲が低下し】ていた．高橋ら[4]は，臨地実習指導者が実習指導を通して抱く思いについての調査し，指導しても学生の反応が薄いことを学生自身の問題として明らかにしている．

一方，指導者が学生の実習に対して意欲を感じると【積極的に説明したいと思う】という結果も得られた．金子ら[7]は，臨地実習指導に対する意識をやりがいと関心度，自信度，負担度の関係について調査し，実習指導にやりがいを感じている指導者は学生への関心度，自信度も高いことを明らかにしている．

学生の反応の薄さは，指導者の指導意欲の低下をまねき，学生への関心の低さや，指導に対する負担感を増す要因となる可能性がある．このことから，指導者の関心や意欲を高めるためには学生に事前学習を促し，学習意欲を高めることが必要であると考える．学生が自ら質問する，反応するという主体的な学修姿勢は指導者にとっては刺激となり，指導者の意欲向上につながる可能性がある．これによって，指導者と学生の関わりも増え，学生にとっては個々の場面や事象を指導者とのやり取りの中で体験することができ有意義な学びになると考える．

また，勝原[9]は，実践学習活動にむけた認知レベルの準備として，学生は学習目標，実習施設，教員・学生・スタッフの役割などについて十分理解しておく必要があると述べている．さらに，スタッフの役割として患者に関して疑問に思うようなことがあればスタッフを資源として活用するよう学生には働きかけるべきであるとも述べている．これらのことから教員は，学生が指導者へ主体的に関われるように，学生に対して実習目的・目標を明確に提示したオリエンテーションを行う必要があると考える．また，指導者については学生の学習意欲を高めるためのスキルを学ぶ機会を提供し，指導に対する自信につなげることも重要であると考える．

Ⅶ．結論

透析看護に携わる実習指導者へのインタビューを行い，実習指導の実際を説明する10のカテゴリーが抽出された．さらに，各カテゴリーの関連をデータの文脈に沿って関連づけた結果，看護学実習指導の一連のプロセスが得られた．この結果から，慢性期看護学実習の教員の課題として，実習の事前準備，実習内容の検討，指導者の意欲向上支援の必要性が示唆された．

謝辞

本研究を進めるにあたり，研究の主旨をご理解頂き快くご協力いただきました透析室看護師の皆さま，フィールドを提供してくださいました施設関係者の皆さま，和歌山県立医科大学保健看護学部基礎看護学教授鹿村眞理子先生には，フィールドとの調整をしていただき，心より感謝申し上げます．

引用・参考文献

1) ピエール ウグ（編集），黒江ゆり子(訳)他：慢性疾患の病みの軌跡―コービンとストラウスによる看護モデル，第4版第8刷，医学書院，2010.
2) 細見明代，熊川ケイ：血液透析患者のQOLの向上に関する一考察，神戸市立看護短期大学紀要，14：83-93，1995.
3) 仲沢富枝，金子道子，小野興子他：壮年期人工透析患者のセルフケアの実態（第一報），山梨県立看護短期大学紀要，2(1)：153-165，1996.
4) 高橋悦子，松本千恵子他：臨地実習指導者

が実習指導を通して抱く思い―アンケートの自由記述の分析より―，第40回看護学会論文集(看護教育)，158-160，2009.
5) 阿部緑，煙山晶子他：病棟看護師の老年看護実習指導における学生に期待することの分析，秋田大学医学部保健学科大学紀要，12(2)：158-166，2004.
6) 橋田由吏，吉本知恵他：臨地実習における看護師の実習に関する意識－実習指導についての自由記載より－，第35回看護学会論文集(看護教育)，262-264，2004.
7) 金子美香子，鈴木のり子他：臨地実習指導者の指導に対する意識，第36回看護学会論文集(看護教育)，227-229，2005.
8) 佐々木睦美，石崎幸子他：臨地実習指導者の学生との関わりに対する認識，第36回看護学会論文集（看護教育），236-238，2005.
9) キャスリーンB.ゲイハーソン，マリリンH.オールマン，1999，勝原裕美子監訳，臨地実習のストラテジー，医学書院，2005.
10) 藤岡完治，安酸史子他：学生とともに創る臨床実習指導ワークブック，第2版，医学書院，2008.
11) 杉森みど里，舟島なをみ：看護教育学，第4版増補版，医学書院，2009.
12) 鈴木志津枝，藤田佐和：慢性期看護論，2刷，ヌーベルヒロカワ，2006.